

白ねずみの飼育

長崎祐子

私の組の研究

十月のはじめ、単元「動物」を設定した機会に、私のクラス（年少組）では白ねずみを飼うことになった。離乳後約一週間を経た雌を二匹、雄を一匹手に入れた。

飼育の方法

○飼育箱

ミカン箱の半分位の木箱に金網張りのふたをつける。木片を子どもたちと一しょに組合わせ、二股釘で金網をとめた。

○しきわら

お米屋さんで餌を買うとき、さんだわらを買ってきて5センチ位の長さに切り、

箱の1/4位の深さまで敷いておく。一週間位

でこのわらは

ねずみがこぼ

した餌や糞尿

で汚れ、強い

臭気を放つので一週間に一

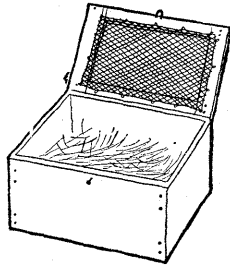
度位、中のしきわらをと

りかえなければならぬ。汚れたわらは庭

の隅に穴を掘って埋める。

○餌の与え方

空ビン（あれば三角フラスコ）にコルク



栓をしっかりとめ。長さ15センチ、内径5ミリ程度のガラス管の先をガラスの炎で焼き、安全にしてコルク栓に通す。ビンに水を入れて箱のふたの上からななめに金網の中にさしておく。ねずみは管の先を両手で握り、小さい舌で上手に水を吸い込む。水は一週間に一度位とりかえる程度でよいが青野菜があれば水を与える必要はない。

ムギ・コメ・

トウモロコシ・

パンくず・芋・

ニンジン・青野

菜など何でも食

べるが、一日に

三匹でムギ1/3カ

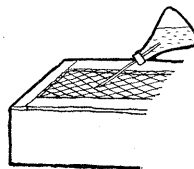
ップ位と青野菜一握り程度の分量を与える

た。なお、ニボシ少量を週に二回位加える

とよい。

○取扱いは

手袋をはめて、背中か尾をしっかりと手



早くつかむ。

次に子どもたちが興味をもって育てる白ねずみがどのように成長していったか日誌の中から数例を拾ってみよう。

・十月二日

短期大学よりねずみをわけていただき、集って飼いの説明をする。早速ねずみに家をつくってあげるようになった。木箱を見せてふたの作り方を相談した。板を切ってふたにするという意見がでると、それでは中にいるねずみが見られないからガラスをはるとよいという。しかしガラスでは息がしにくいし、われるから針金をたくさんはればよいという。いろいろの意見がでたが、結局動物園のような網がよいということになって大きい金網を切る子ども、木片をみつめて箱の大きさに合わせてわくをこしらえる子どもなどができた。金網は二股釘で二・三本ずつ分担してはりつけた。

・十月三日

毎日八百屋さんに野菜を買いに行つて餌を与えなければならぬので当番の仕事が新しく増えた。登園して遊びにとりかかると前に野菜を買い、餌を与えることが子どもたちの大きな魅力となってきた。

・十月十日

二・三日前に箱の掃除をして、新しいかたいわらを入れておいたが、箱の中はすっかり落着いて、歯でやわらかく噛みくだかれていた。ねずみの歯は小さいが強く、木や壁や鉛でもかじれることを話した。

・十月十八日

今日の当番はねずみに餌を与えるのを忘れてしまったので、帰る前に子どもたちを集めて次のようなことを話し合った。

朝起きてから眠るまで何も食べなければ私たちはどうなるか。お母様が御飯をつくるのを忘れてしまったらどうなるか。ねずみも今日は何も食べていないのでお腹をす

かせていないだろうか。

ねずみは夜は何をしているのだろう。お昼の間は何をするか。……

そして生きているものは人間でも動物でも御飯をいただくこと、眠ること、運動することが必要であることなどについて考えた。

・十一月一日

しきわらをとりかえようとすると、箱の一隅に赤いものがちらりと見える。よくみるとそれは九匹のねずみの赤子である。ねずみの形はしているが、ちょうどカナリヤの赤子のように半透明の赤色をしていてしわだらけで毛は生えていない。勿論目は開いていない。

赤子は一回平均九匹で年に大体四回生まれるそうである。

子どもたちはとても見たがったが、人のぞいたり、さわったりすると危険を感じて食べてしまうことがあるから一週間位は

見ないことを約束した。

「お口もあるの?」

「じっぽは長かった?」

「どのくらいが大きかったの?」

と、たいへんな好奇心をもっているの、
できるだけくわしく話して聞かせた。まだ
三・四グラムしかないような、たよりに
体つきである。雄親は食べる可能性がある
ので離して、雌親のためにニボシを二・三
本入れてやった。

・十一月八日

子どもが生れてから一週間が経過したの
で箱を庭に出して、そっとしきわらをと
りかえようとすると、もう一方の隅に以前と
どうようのかたまりが見えた。思わず息を
のみ、手を引込めた。今度は七匹位。二匹
の母親ねずみはそれぞれ、子どもの側に動
かずにいる。先に生れた赤子にはうっすら
と白い毛が生えはじめている。新しい赤子
のために、また一週間のぞけなくなっ

まった。しかし子どもたちは大喜びでもう
一つ家を作ろうとって張切っている。

・十一月十一日

小さい方の赤子が二匹紫色になって死ん
でいる。とも食いをする癖がつくのでそれ
をとり出し、みんなでお墓を作った。「どう
してねずみさん死んじゃったの?」と口々
に言うので、お部屋で集ったときこのこと
について話合った。お乳が足りなかったの
ではないかということになったが、「せんせ
い、ねずみのおっぱいいくつあるの?」と
の質問に、はたと考えてしまい、子どもた
ちと一しょに数えることにした。左右に四
つずつ、合計八つあることがわかった。

・十一月十八日

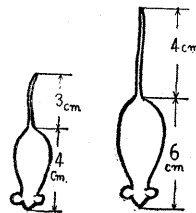
先に生れた子ねずみは目をあけてちよ
ろ動く。

親に与えた麦を両手でつかんで食べはじ
めた。

・十二月三日

子どものねずみの成長が目に見えてわか
るので体長を計ってみることにし、しっ
ぽを持ってぶらさげて計った。

生後四週間のねずみ



生後三週間のねずみ

年が明けると、先に生れた方も後の方も
すっかり成長して、尾の長さは14センチ、
体の長さは19センチになっていた。発達が
目立つ頃、お休みで計ることができなかつ
たのが残念である。

・一月十六日

お話づくりをした。最初は

「あるところに仲のよい白ねずみの兄弟が

ありました。」

と私が話し出して、続きを子どもたちが考
えてつけたらいい。ところが、子ども
たちにはいつも箱の中でパンくずや麦など
を食べているねずみが印象的とみえて、お
隣の家の戸棚に入って食物を残らず食べて
来てしまう話ができ上がった。このお話がで
けると、これを劇にしたいという意見がで
て、ねずみや野菜やお菓子のお面ができ
た。実際に劇あそびをしてみると、とても
上手にねずみの動きを真似する。普通、絵
本などではしつぽで餌を運ぶことが常識に
なっているが、クラスのねずみは両手で上
手につかんで穴の中に入るの、劇の中で
もその通りにしていた。

次に、飼育が、子どもたちにどのような
影響を与えたか考えてみよう。

動物に限らず、あらゆるものに好奇心を
もって観察する態度がみえてきた。例え

ば、庭で遊んでいるときみつけた木の実、

虫の卵、木の葉などを拾ってきて、虫めが
ねで順にのぞいてみたり、(よく虫めがねで
ねずみの耳やシッポをみている)雪が降る
と一片を手にしたてて観察したりする。また
「寒くなると、ねずみを庭に出しておくとい
けないからお部屋で飼いましょう」とい
うと、「部屋の中の温度と外の温度とどの位
違うの?」と聞く。勿論何度と教えて
てもわからないが、外の寒暖計の赤い線と
中のとを並べると納得できた。

その他、動物の生態、生活について興味
を示し、動物を愛する心(食物を与えた
り、死んだねずみのお墓を作ったり、可愛
がったりする)がみられる。ねずみと同時
にヒヤシンスの水栽培もしているが、動物
の方が、子どもの心により近くなっている
ことがみられる。

また、自然に関するものとともに社会性
の発達、特に緊張度の強い消極的なT男に

とって非常にプラスになる点が多かった。

一番をきめて二人の子どもが自発的に責
任を守るまでには三週間位かかったが、自
分の番になるのを楽しみに待ち、その日に
病気で欠席しなければならなくなったとき
など、とても残念がる子どもや、代りに誰
がしてくれるかと心配する子どももいると
いう話を家庭から聞かされた。当番にな
ると、二人の子どもと私は園の前の八百屋さ
んに餌を買いに行くが、五円や十円を出す
と、おとなになったような満足した気持ち
もつらしい。お金の大切さ、役目を知るよ
い機会である。また、二人の手をひいて買
いに行き、餌を与えることによって私と子
どもとの個人的な関係が密接になっていっ
たこともみのがせないことであろう。

T男の場合、入園以来一人遊びのみで、
声を出したことも数える位しかなく、何か
のはずみで他人の視線を感じると真赤にな
ってしまう。過保護の中に育った末子で、

園では非常に内向的である。

ところが、ねずみを飼いはじめたとき、

T男は他の子どもがいなくなると、箱の中に手を入れてねずみと遊び、指を噛まれても輝くような目つきで見ているのだった。

身長を計るときは、他の子どもがつかまえることができなくても、つと後から遠慮深そうに出てきて尾をつかむので、次第にこれはT男の役目として子どもたちも認めていった。テレビごっこ単元のとき、自分たちの作ったテレビのニュースにT男がねずみをぶらさげて体長を計っている絵を大勢の子どもたちが書いた。このようにしてT男はクラスから認められ、遊びの中に友だちとして誘われるようになっていった。最近では、活潑な男児のグループの中でも、かなり自己主張をするようになってきた。ねずみを仲介とする急速な社会性の芽生えに私は目をみはるばかりである。

(東洋英和幼稚園)

保育の中の童話

佐久間雅子

私の組の研究

○はじめに

童話は幼児の言語発達を助けるだけでなくその生活の内部に根をおろして、成長の糧となり「幼児期によい話を豊かに与えられて成長した人は円満である」といわれる位、その精神発達に大きな影響力を持つものです。それ故、私共は保育者として、よい話を常に最善の方法で与えたいと願わずにはいられません。そこで、私は童話(広い意味でのお話)を効果的に保育の中に活かし、子どもの生活の中に溶け込ませていくために、いろいろな与え方の工夫をして

みました。なお、対象になっている私の組は、四才児、二四名です。

○保育計画と童話

まず、子どもの発達の時期に適し、且つ、内容の傾向がたよらないように考慮されなくてはなりません。題材を選ぶには、カリキュラムに沿って季節や単元が全体の基準にはなっていますが、絶えず子どもの生活のみつめ、その時の子どもたちの状態に最もふさわしい話を見いだすように努めます。